

「いちじくの木が枯れる」

2014年10月18日

マルコによる福音書 11章 12節～14節、20節～26節。翌日、一行がベタニアを出るとき、イエスは空腹を覚えられた。そこで、葉の茂ったいちじくの木を遠くから見て、実がなっていないかと近寄られたが、葉のほかは何もなかった。いちじくの季節ではなかったからである。イエスはその木に向かって、「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。

翌朝早く、一行は通りがかりに、あのいちじくの木が根元から枯れているのを見た。そこで、ペトロは思い出してイエスに言った。「先生、御覧ください。あなたが呪われないいちじくの木が、枯れています。」そこで、イエスは言われた。「神を信じなさい。はっきり言っておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりにになると信じるならば、そのとおりになる。だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。また、立って祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる。」

主イエスの一行は朝、ベタニアを出てエルサレムに向かった。出発した時から空腹であったというから朝食も取れない貧しい一行であったことを伝えている。葉の茂ったいちじくの木を見つけ、実を求めたが、実る季節でなかったからついていなかった。すると、主イエスは「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこの呪いのような言葉を聞いていた。

翌朝早く、同じ道を通ってエルサレムに向かった。すると昨日、主イエスが「お前から実を食べる者がないように」と言われたいちじくの木が根元から枯れていた。季節ではない時に、実を求め、ないからと言って、呪って枯らしてしまう。まるで、駄々っ子のように、主イエスのすることとはとても思えない。こんなことはあり得ない。奇跡には人間に関する奇跡と自然に関する奇跡があるが、自然に関する奇跡は、その通りに受け止めることはできないし、その必要もない。

著者マルコは、主イエスの思いを知り、主イエスの口に乗せてメッセージを伝えようとしている。それは、実をつけず、葉ばかり茂ったいちじくの木は虚栄のエルサレムを指し、そのエルサレムは滅びるというメッセージであろう。エルサレムは宗教、政治、経済において荘厳で、華麗で、繁栄しているように見えた。しかし、主イエスの目には虚栄の町で、滅亡は必定と写ったのである。マルコは、枯れたいちじくの木の記事から、主イエスの思いを代弁している。事実、エルサレムは紀元70年に滅びている。

枯れたいちじくの木を見て、驚き恐れる弟子たちに、主イエスは「神を信じなさい」、神を信じる時、山が動く、また「祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい」と言われた。神を信じる者は確かな実をつけるというメッセージではないか。神なき文化、文明は栄耀栄華をいくら誇っても、葉ばかり茂ったいちじくの木のような虚像であって、自己追及の果てに滅びていく。この事実を歴史の中で、幾度も見てきた。神のリアリティに裏打ちされたところで、豊かな実を実らせることができる。その実とは「赦してあげなさい」という実である。神から赦された者として赦し合って共に生きる。「共生」が実現しているところに、神からの祝福に与る愛の実が実る。